

審良 静男

免疫学フロンティア研究
センター拠点長(昭52)

に文化功劳者

(3面に関連記事)

た。族議員と官僚による税の
一党支配が終焉を迎えまし
ました。日本にも大きな変化が起
りました。56年続いた自民党
の一党支配が終焉を迎えた。

最後に「今年から少しづつ世
界は良い方向に向かって『變
革』していくことを期待したい
と思います」と結びました。
そしてそれが現実になりつつ
あります。1月にアメリカに
初めての黒人大統領が就任し、
そして世界は彼に地球上から
の核廃絶を期待してノーベル
平和賞を贈りました。

日本でも大きな変化が起
りました。56年続いた自民党
の一党支配が終焉を迎えた
た。族議員と官僚による税の
張のもとに医学医療は急速に
が増加するという厚労省の主
張です。医師数を増加させると
医師数を増加させると医師
1人当たり何億円かの医療費
江戸末期にタイムスリップ
した脳外科医がカナヅチとノ
ミで硬膜下血腫を手術すると
ござります。

新年明けましておめでとう
ございます。
私は昨年の年頭あいさつの
最後に「今年から少しづつ世
界は良い方向に向かって『變
革』していくことを期待した
と思います」と結びました。
そしてそれが現実になりつつ
あります。1月にアメリカに
初めての黒人大統領が就任し、
そして世界は彼に地球上から
の核廃絶を期待してノーベル
平和賞を贈りました。

無駄遣いが少なくとも改善さ
れていくのではないかという
ことを国民は期待しています。
民主党は「コンクリートから
人へ」というスローガンをか
かげています。私は総合科学
技術会議議員であった時第Ⅲ
期科学技術基本計画の策定に
あたりましたが、その時「モ
ノからヒトへ」という主題を
かかげることを主張し、それ
がテーマとなつたことを思い
出します。

進んでいるにもかかわらず20
年以上に亘って医師数は抑制
されてきました。“有識者”
“学識経験者”と称する人を
集めた国種々の審議会の多
くは省庁の官僚の作成した作
文を承認するだけの存在であつ
たように思います。その結果
たようになります。その結果
「医師数の抑制」や「新臨床
研修制度」が取り入れられ、
今その結果として地方の病院
の医師不足、救急患者のたら
い回しといった現象まで起こ
るようになってしまった。

「銀杏メディカルネット」に期待して

理事長 岸本 忠三



第225号

社団法人
医学振興
銀杏会

06(6879)3501

G W f 1 H

川越裕也
門田守人
杉本央
木村正
山分祥興
荻原俊郎
米田正太郎
武田雅俊
黒木尚長

いつTVドラマがありました。
この外科医はこの150年の
医学と器具と薬の進歩が如何
に大きかったかを身をもって
体験するといつストーリーで
す。今も治らない病気に苦し
む人はたくさんいます。10年、
20年、50年後が同じであって
はなりません。医学は更に進
歩を続けなければならない。

そしてその中核となるのはや
はり太字です。
優秀な卒業生が大阪大学病
院で、研究室で、明日の医学
を作っていくために頑張る
と、そこで新しい考え方や技
術を習得した優秀な医師が関
連病院で現在の最先端医療を
用いて患者を治すこと、そつ
つことがスムーズに行われ
欲しいと思います。
今年は新しい政府のもとで
壊れつつあった日本の医学、
医療が回復していくことを期
待したいと思います。

画題「レイク・ルイーズ黎明」油彩12号



懸り、旅で、2008年6月念願のカナディアンロッキーを旅する機会に恵まれました。ちょっとと贅沢な生涯で、最後の朝晴天続きで、最初の雪前午後5時頃の湖は連日鏡のように周囲の山々を写していました。湖の色自然に目覚めただけで、湖面の美しさに静かな湖に遭遇しました。湖の一部も茜色から墨色に染まっていました。帰国後早々にその印象を描いてみました。

森本靖彦
(昭36)

公益社団法人移行手続の進捗ご報告

会員の先生方の多大なるご協力を得まして足かけ二年に及んだ本会内の手続きをすべて終え、内閣府に対して平成21年11月26日付で、現在の特例民法法人（旧社団法人）から公益社団法人への移行認定を申請いたしました。現在、内閣府の公益認定等委員会において審査中です。認定へ向けての進捗状況は今後隨時お知らせいたします。

なお、公益社団法人へ移行した場合の定款や規則等、および移行時最初の代議員等につきましては、会費を納入された会員の先生方あてに平成21年12月に送付いたしました「学友会名簿（平成21年）」の31～43ページに掲載しておりますのでご一読ください。

これまでの経過

平成20年5月30日	定時総会において、公益社団法人へ移行することを承認議決
平成21年3月～5月	公益社団法人移行時の最初の代議員候補者信任手続き
平成21年5月31日	定時総会において、公益社団法人への移行のための定款改正案・規則改正・制定案・移行時最初の役員・代議員案を、議決権総数の80.2%の賛成を得て承認議決
平成21年11月20日	臨時理事会において公益社団法人への移行申請書類を承認
平成21年11月26日	内閣府に対して移行認定を申請。（現在審査中）



講演者 瀧野敏子先生

地域医療の課題とその対策

第21回シンポジウム

平成21年度の医学振興銀杏会主催（後援：大阪大学医学部附属病院）卒後教育開発セミナーのシンポジウムは、11月5日（木）銀杏会館の阪急・三和ホールにて開催された。曇天ではあったが、多数の関連病院の代表や阪大病院の教授および教室代表が出席した。

定刻に開会。早石雅宥副理事長（昭42）の司会で岸本忠三理事長（昭39）が開会の辞を述べた。次に平野俊夫研究科長（昭47）が学部報告、林紀夫病院長（昭47）が阪大病院の現状を報告した。

現在最も関心の深い、「すべての職員にとって働きやすい」という状況であり女性社員が産休・育休を取得して戦線復帰に「女性を差別する余裕がない」といっており、女性を差別する余裕がない」といふ状況で、女性社員が産休・育休を取得して戦線復帰することは当然となっている。

仕事と家庭を両立させつつ戦力となっている企業社会の女性は、さらに管理職に登用されるために次なる課題に立ち向かっている。医療界において若年医師の人生観は病院管理者世代とは大きく変化している。イージェイネット

瀧野 先進的企業ではすでに競争時代を生き残るために「働きやすい病院評価事業（ホスピレート）http://www.hospitalize.jp/」を行なっている。イージェイネットは上記の調査では男女にかかわらずワークライフバランスを重要視していることが明らかになっている。病院運営から見た女性力活用の枠組みは、①Fair、②Care、③Careerの3点である。イージェイネットは上記の観点から「働きやすい病院評価事業（ホスピレート）http://www.hospitalize.jp/」を行なった。認証病院は、人事制度や勤務体系、労働環境の改善に様々な工夫をこらした結果、女性医師増加、看護師の離職率低下という果実を得た。この結果、患者様へサービスを改善し患者増をもたらした。全ての病院に共



コーディネーター 伏見尚子先生④と清野佳紀先生

閉会の言葉を伏見尚子副理事長（昭36）が述べ、シンポジウムは無事終了した。講演の主旨は、「学友会誌」（本年度会費を納入済の方のみ本号と同封）に掲載しているので、ご高覧願いたい。

事業追跡調査報告書 http://www.hospitalize.jp/pdf/090612.pdf

通するのは、①女性医師確保のため多様性に対応（個人の人生に配慮）していること、②多様性への対応は経営課題そのものだと認識していること、③院長のリーダーシップによるところが大きい、といふ点であった。ホスピレート

平成21年度秋 叙勲と受賞

文化功労者	審良 静男 (昭52)	日本医師会最高優功賞	永山 克巳 (昭28)
紫綬褒章	岡野 栄之 (細神経)	日本医師会最高優功賞	島 健二 (昭34)
瑞宝中綬章	桜葉 周三 (昭28)	日本医師会最高優功賞	酒井 國男 (昭43)
瑞宝中綬章	井町 恒雄 (昭34)	日本医師会医学賞	米田 悅啓 (昭56)
瑞宝小綬章	江部 高廣 (昭35)		



審良 静男教授 (昭52) の

文化功労者選出を祝う

位となっております。このよ
うな教科書を書き換える発見
をされた業績が評価され、文
化功労者に選定されました。

先生は現在、世界的に認め
られる研究拠点を作ることを
目的として設立された免疫学
フロンティア研究センターの

2009年11月、審良静男先生が文化功
労者の栄誉に浴されました。このことは、
免疫学フロンティア研究センターの関係者
はもちろん、大阪大学にとりましても大変
喜ばしいことであり、先生には心からお祝
いを申し上げます。

大阪大学は、免疫学の研究が昔から盛
んに行われてきています。その中、先生
の師である岸本忠三元総長が1990年
に、さうにその師である山村雄一元総長が
1988年に文化功労者に選出されてきて
います。大阪大学の免疫学研究が累々と引
き継がれながら発展してきていることを改
めて感じることができます。

審良先生は内科医を3年勤められたあと、

昭和55年より免疫学の研究を
開始され、岸本先生のもとで
インテロイキン-6 (IL-6)
の細胞内シグナル伝達に関わ
る転写因子 NF-IL6 とシグナ
ル伝達分子 STAT3 をクロー
ンングし、IL-6 のシグナル
伝達経路の解明に大きく貢献
されました。

平成6年に兵庫医科大学の
教授に就任され、からは、ショ

ウジョウバエの自然免疫応答
に関する TLR という分子に
注目され、哺乳類 Toll 分子
(TLR) の機能を、遺伝子欠
損マウスを用いて解析されま
した。免疫系は、異物を認識
してそれを排除するシステム
で、自然免疫系と獲得免疫系
から成り立っています。しか
し、20世紀までは抗原を認識
するリンパ球が主役を務める
うな教科書を書き換える発見
をされた業績が評価され、文
化功労者に選定されました。

先生には、免疫学研究のトッ
ピックを引き継ぐ若手
研究者の育成にも力を注いで
いました。このような成果
は、世界的にも高い評価を
受けいて、先生の発表され
た論文の引用率は2005、
2006年と続けて世界で一
位となっています。このよ
うな教科書を書き換える発見
をされた業績が評価され、文
化功労者に選定されました。

大阪大学は、免疫学の研究が昔から盛
んに行われてきています。その中、先生
の師である岸本忠三元総長が1990年
に、さうにその師である山村雄一元総長が
1988年に文化功労者に選出されてきて
います。大阪大学の免疫学研究が累々と引
き継がれながら発展してきていることを改
めて感じることができます。

審良先生は内科医を3年勤められたあと、
そのままいていたところを、自然免疫系が TLR
に就任しました。

▽昭和52年3月 大阪大学医学部卒業

▽昭和53年6月 市立病院内科に勤務
▽昭和60年3月 カリフォルニア大学バークレー校に留学

▽昭和62年6月 大阪大学細胞工学センター助手に就任

▽平成8年1月 兵庫医科大学学生化学講座教授に就任

▽平成11年4月 大阪大学微生物病研究所教授に就任

▽平成17年5月 紫綬褒章

▽平成18年1月 朝日賞

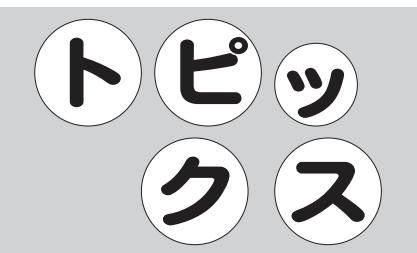
▽平成19年6月 恩賜賞・日本学士院賞

▽平成19年10月 大阪大学免疫学フロンティア研究

▽センター教授および拠点長に就任

【略歴】

竹田 潔 (平4)



脳神経外科のうち脳腫瘍や脳動脈瘤、頭部外傷などの分野は皆様方にも馴染み深いものと思います。しかし、最近ではパーキンソン病など神経機能の異常を修復する「機能的神経外科」という分野も最近重要性を増しています。私どももこの分野に力を入れており、今回はそのなかでも新しい取り組みである「ブレイン・マシン・インターフェイス(BMI)」を紹介させていただきます。BMIとは、「脳と機械の間で信号をやり取りして、運動や感覚機能を補填する技術」とされます。私がもは脳波を解析して(脳信号解読)、デコーディング、ヒトの意図するところを察知し、コンピュータやロボットを動かす技術の開発を行って

いいます。

この技術は「**ソフト脳**」での実験(Chapin,Nature Neuroscience,1999)がきっかけとなって、神経科学者に注目され始めたものです。ヒトへの応用は日本では大阪大学、米国ではデューク大学、ワシントン大学などで進められています。デューグ大学の方法は動物実験から発展し、脳に針状電極を刺入するのに対し、私たちの方法は難治性疼痛やてんかん患者さんの手術に端を発するもので、脳表にシート状電極を置くだけです。脳表からでも、次運動野からの信号を見出しました。(Yanagisawa, Neuroimage, 2009) この電極は脳を傷付けず、安定しておらず、臨床的に現実的な方法と考えられます。この方法により実際にコンピュータカーネルやロボットアームのリアルタイム制御が可能であることが実証されました(図)。現在、集積回路や送信装置、電源などを皮下に埋め込んでワイヤレス化し、高位頸髄損傷や閉じ込め症候群など、「脳

へ動かない」患者さんが「念じただけで」コンピュータや電化製品、ロボットなどを操作したり、人工言語により意

思を伝達できるシステムの開発を進めています。

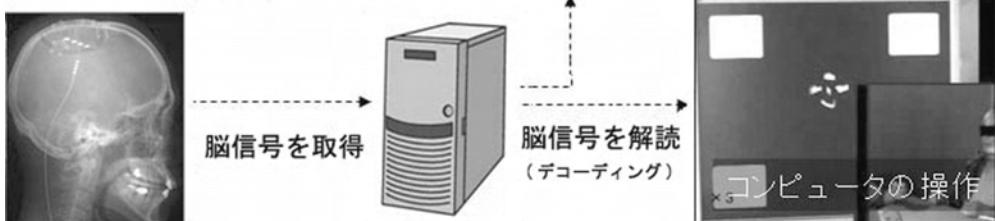
大阪大学グローバルCOE 文部科学省「脳科学研究戦 略推進プログラム」のひとつ 「認知脳理解に基づく未来工学創成」とも密接に連携して

あります。

吉峰俊樹 (昭50)
脳神経外科
吉峰俊樹 (昭50)

脳とコンピュータをつなぐ

～ブレイン・マシン・インターフェイス(BMI)～



提言

医療費に関する
抑制政策は政権交
代に伴い見直され
そうである。しかし、
医療費を「国
民負担」とども、
「重荷」だが仕方なく払わね
ばならない、と考えるなら政
策が変われば目の敵にされ、
再び抑制の対象になるであ
る。医療費は本当に単なる國
家のお荷物なのであろうか？
厚生労働省の統計によると平
成17年、医療機関（病院・診
療所・歯科診療所）で医師・
看護師から事務職員、清掃員、
員まで約263万人が働いて
いる。これは国民医療費から
みて33兆円（同年）の巨額
「売り上げ」産業が263万
人の雇用を生み出している、
と考えられる。

この「売り上げ」は2兆円
の医療機器生産や、6・4兆
円の医薬品生産金額の大部分
に貢献し、さらなる雇用を生
み出している。一方平成19年
の経済産業省商業統計では百
貨店・総合・専門スーパー・マ
ケットを合わせた小売り販売
額が39兆円、従業員は170
万人である。医療を「売り上
げ」の面から見ると何事か、
というお叱りを受けるかもし
れない。しかし、医療は国民
を占め、特に医師が直接患者
の健康回復と幸せを生産する
の健康回復と幸せを生産する
に使用する治療機器の60%以
上が輸入品であることは日々
手術場で実感している。以前
は強かつた超音波などの診断
機器も輸入率がじわじわ上が
り、画期的な診断機能がつい
て医療技術開発ができるよう
に有力なのが、脳科学
を含めた医学であることは
面白い。まさに「違和感」
を「腑に落とす」のが学問
であり、ここに楽しみがあ
る。このような学問は、自
由がなければ成立しない。
阪大に学問を学ぶ。良い選
択をした、と思つ。

私の故郷は山口市、三方
を山に囲まれた静かな街で
ある。子供の頃、裸障子の
裏に見つけた墨書きは、維新
の志士の落書き聞く。彼ら
の志と比べようもないが、
阪大を選んだ。他の帝大と
異なり、地元大阪人が多い。
大阪弁は強烈だが、むしろ
浪速の作法にある種の「違
和感」を覚えた。その後、
医と法を巡ると13世紀イ
リーブ随筆

…その126

米国テネシー州オーケクリッジに留学する。自然豊かで黒人が多い田舎町である。南部訛と文化習慣は、米国でも異色である。だが身構えていたこともあり、不思議と「違和感」がなかった。

帰国後、血管外科の臨床を担当する。期せずして、司法と関わる。司法判断に、

違和感の源流

根源を求めて、法学者と研究会を年5回ひらく。法学者は、法學を離れると意外に好人物が多く、人間的な「違和感」は少ない。

「思」の漢字がもつ「意」と「思」の強弱を、法は区別しない。これでは患者の意思を確認しても、同意は常に搖れ動き定まらない。

タリアに至り、当時は論理学として学問体系を同じくする。日本への導入は明治維新である。文明開化のために、また不平等条約改正のために、異国の言葉の翻訳を急いだ。しかし文化の違いから、適切な日本語が無く造語を行う。今では、大切な言葉の解釈が医と法で異なる。例えば法學は、意志にかえてすべて意思という言葉を使う。「志」と

の健康回復と幸せを生産する「聖なる仕事」であると同時に、国民生活を雇用面からも大きく支えている巨大産業である、と考える方が建設的ではないだろうか。

「思」の漢字がもつ「意」と「思」の強弱を、法は区別しない。これでは患者の意思を確認しても、同意は常に搖れ動き定まらない。

相手のことばや人種や都鄙の違いに気付くのは容易である。話しあつ前に身構える。予測できた意識の違

いは、違いつつあるだけである。話しあつ前に身構える。予測できた意識の違

医療費と興国論

その大きな金額がさうに日本を繁栄させるための課題がない。医療機器は国内市場のほとんど外資系製薬会社の輸入品が45・4%（平成18年）で、日本発の標準治療薬は皆無に近い。このようないい患者をちまちま診る開発力の差がひいては貴重な医療費の国内循環を妨げている。医療界が日本社会の発展に更に貢献するためにも、健康を守るだけではなく国内産業・輸出産業として医療機器や医薬品の開発力・国際競争力を増すことをもっと医師・研究者は意識してもよいと思う。そのためには病院側の治療院に医師を集め、ひとりを持つ本を標準とする抗癆剤評価は欠かせず、今までのよ

うな小規模の大学病院が少数製品であり、日本発の標準治療薬は皆無に近い。このようないい患者をちまちま診る開発力の差がひいては貴重な医療費の国内循環を妨げている。医療界が日本社会の発展に更に貢献するためにも、健康を守るだけではなく国内産業・輸出産業として医療機器や医薬品の開発力・国際競争力を増すことをもっと医師・研究者は意識してもよいと思う。そのためには病院側の治

木村 正（昭60）

血管外科
センター顧問の正岡徹先生
(昭32)にお願いします。

川崎富夫(昭54)

紹
診
療
科
介

内分泌・代謝内科

大阪大学内分泌・代謝内科は教室員60名あまり、平成19年に発足した同窓会の会員数は400名に近い、日本でも最大規模の陣容を擁する内分泌・代謝内科学教室です。同門の先生方は、広く学問医療の世界で活躍されています。

2000年、先代の松澤佑次名誉教授（初代内分泌代謝内科科長）が阪大病院長であられた時に、診療・教育を診療科別で行う阪大内科系科の診療科別教室編成の基礎が築かれました。そして2009年4月、旧第1内科、旧第2内科、旧第3内科からの代謝あるいは内分泌の複数のグループが同じフロアに一同に会し、診療、教育、研究、すべてをともに行っていく、名実共に一体となった教室が始まりました。

第一研究室は、旧第1内科グループを発足させました。第一研究室は、糖尿病研究室を起源とし、糖尿病の流れを重視した理論的なインスリン治療学は、日本人の

糖尿病治療のスタンダードを作りました。また、臍臍ベータ細胞の転写因子研究やシングル伝達異常に関する仕事で国内外に高い評価を築いてきています。

第二研究室は、旧第2内科内分泌代謝研究室を起源として垂井清一郎名誉教授をはじめとして、糖尿病への貢献、インクレチン概念の発見は世界的なものであり、また1型糖尿病が自己免疫疾患であることを組織学的に世界に先駆けて示し、さらに最近、劇症1型糖尿病という新たな疾患概念の発見に至っています。

第三研究室は、旧第2内科アディ・ボサイエンス研究室を起源とし、松澤名誉教授に導かれた内臓脂肪型肥満、内臓脂肪症候群、メタボリックシンдром概念発症の研究室です。

第四研究室は、旧第3内科内分泌研究室と旧第2内科病態学研究室を起源とします。大阪大学は、熊谷朗先生、松本圭史先生の時代より日本の内分泌学のメッカであり、その研究、臨床の中心を担つてきました。旧第3内科のグループで私が指導していた病理病態学教室のグループが一体となつたものです。高い学問レベルで臨床の課題の解明と治療法の開発を目指す研究室です。

これまで多くの偉大な先輩達が築いてくださった大きな学問の潮流・伝統を引き継ぎ、さらに発展させて、将来、大

学の教官として、研究者として、医療者として、日本の医学・医療の発展を担つてくれる医学生を育てていくことに力を注いでいきたいと考えています。

診療においては、地域の基幹病院としての役割を十二分に果たすとともに大学病院として新たな診断・治療学の構築を行うことを常に目標にして臨床を行っています。すべ

ての代謝内分泌疾患を対象とし、中でも、CTや腹部インピーダンス法を用いた内臓脂質学です。昨年、糖尿病メタボリックステーションを院内に発足

させ、他科の先生方と有機的に協力し糖尿病としてメタボリックシンдромの先駆的な実践は当科の特徴です。昨年、糖尿病メタボリックシンдромの長期的

移植患者の血糖管理、クリンical法を用いた全身の糖の流れの解析、また糖尿病の成因、合併症に関する遺伝学的解析も進めています。さらに糖尿病のなかで20%にも至る劇症1型糖尿病という病型を新たに発見しそのような患者さんが集まって来られるのも特徴です。



「患者さんに常にやさしく、患者さんから学び、そして患者さんに返す。」志を高く持ち、教室員として同門の先生方が協力、団結して、診療、研究、教育をおこない、人の世の中に役立っていくことを目標にしています。学友会の先生方におかれましては、今後ともなによろしくご支援おこない、国内外で高い評価を得ています。

次回は、小児科の大瀧教授にお願いさせていただきまし

た。

下村伊一郎（平1）